

東京外語会主催 文化講演会

「歴史はどこまで物語かー『エウロペアナ』に読む中央ヨーロッパの歴史意識」

講師：篠原琢 東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授

日時：10月3日（土）午後2時—4時（続いて懇親会）

場所：東京外国語大学本郷サテライト4階



講師紹介

1987年東京大学文学部卒業、93年同大学大学院人文科学研究科博士課程中退、90-93年カレル大学哲学部に留学、93年東京学芸大学教育学部講師、95年東京外国語大学外国語学部講師、99年同助教授、2008年同教授を経て、09年より現職。主な著作に、『ハプスブルク帝国政治文化史—継承される正統性』（共編著）昭和堂、2012年：「国民国家と市民—包摂と排除の諸相」（共編著）山川出版社、2009年：講座「スラヴ・ユーラシア学」第一巻（共著）講談社、2008年：朝倉世界地理講座「東ヨーロッパ・ロシア」（共著）朝倉書店、2007年：「東欧の20世紀」（共著）人文書院、2006年、他論文多数。訳書に、パトリック・オウジェドニーク『エウロペアナ—二〇世紀史概説』（共訳）、白水社、2014年：A・ポロンスキ『小独裁者たち—両大戦間期の東欧における民主主義体制の崩壊』（法政大学出版局、1993年）など。

<講師からのメッセージ>

このたびパトリック・オウジェドニーク『エウロペアナ—二〇世紀史概説』の訳で、阿部賢一さんとともに第一回日本翻訳大賞をいただきました。阿部さんが文学研究者、私が歴史研究者で、翻訳はこの二人の共同作業でした。

今回は、『エウロペアナ』を手掛かりに、中央ヨーロッパの歴史意識について考えてみたいと思います。チェコの作家で、のちにフランスに亡命したミラン・クンデラはこう書いています。「中央ヨーロッパにはそれ固有の世界観がある。それは『歴史』についての根深い不信に基づくもの、私たちを裁き、審判する、あの理性の化身としての歴史…。」このイメージは、また、ワルター・ベンヤミンの「歴史の天使」というイメージ、「進歩」という嵐が未来から吹いてきて瓦礫の山が積み上がっていくのをただ悲しげに見つめる天使のイメージに通じます。

歴史は物語なのか、出来事の連鎖にすぎないのか、はたまた記憶なのか、そして何より中央ヨーロッパが経験した二〇世紀の破局はそもそも叙述できるのか、そういう『エウロペアナ』を貫くそのような問いは、中央ヨーロッパにある「歴史への不信」に根ざしています。

「歴史への不信」とは何でしょう。それはあの軽快でリズムカルな『エウロペアナ』の叙述とどこでつながっているのでしょうか。「歴史認識」をめぐる議論が喧しい昨今、そんなことを考えてみたいと思います。